いう丸石を心のところへよせかけておく。内部には空洞を作り、わらなどを敷く。夜になるとその中に夜具などを持ち込んで半数交替で番をする。昼になると他の半数が尻まくりになって「でーざいな、でーざいな、でないものはがにごぞう」とどなりながら「さんまた」で地をたたきながら、水のある田へ走ってゆき、膝位まで水に入り、又どなりながらさんまたで地をたたきながら帰ってくる。十四日まで交替でこれをやる。十四日は朝早くおき出し、空洞中に外に積んであったおかざりその他をつめる。特に村人を呼び集めることをしないが、大体時刻をみはからって餅をもって集まってくる。酒一合を買っておき、「さいと」にかけ、残りを一口ずつのむ。世話やきが「さいと」に火をつける。燃え上ると書初をもす。高く上ると手が上ると信ぜられている。持参した餅を「さいと」の火で焼いて持って帰り皆で分けて食う。「くすめき」（口中がはれる病）のまじないになると信ぜられている。さいとは日の出の方角に倒れると縁起がよいとされていた。終るとごもくめしや菓子が分配され行事が終る。（近くの海岸では「さいと」は神社下の海岸にくまれた。子供たちは毎日赤はちまきをし、裸で「でーざいな、でーざいなでないものはがにごぞう」をうたいながらさんまたで地をたたきたたき海へ「こり」をとりにいったという。）

三浦半島漁業発達の史的考察の一部（紀州漁民に依る開発）

高橋恭一

大胆な言葉かも知れないが、三浦半島の漁業が本格的な形をし出したのは、中世末の頃からだといいたい。しかしそれ以前とても決して漁猟を業とする者がなかったのではない。鎌倉期に一大消費地となった鎌倉に近い地理的条件から、特に西側相模湾岸の漁業が漸次整って来たであろうことは勿論否定出来難い。

今ここでそれらを含めた半島全域にわたる考察をしたいが、何分にも紙面が許さないので、主として東京湾岸漁業発達のあとだけを考えてみることにしたい。兎に角、三浦半島の漁業が本格的発展の出発は、小田原北条氏特に氏綱・氏康の頃からであろう。しかもこの発展は上方漁民の力によったもので、東京湾側の開発は主として紀州漁民の手によったものである。以下この点のみを説明してみたいと思う。

小田原が豆相武の文化を集中し、これらの地域の中心となって発展し、それにともなっての産業開発が行われ漁業の進展もあったことは申す迄もない。特に網漁の勃興はこの期の一特徴である。北条氏はこの網漁業に力を入れ、これを奨励保護し上方漁民を酒匂村に移住させた程であり、葛網漁業はこれらから次第に紀州・摂州・勢州などの漁民によって当地方に伝播され、技術的に進んだこれら出稼移住民によって、地方漁民に漸

次伝えられていった。

特に紀州漁民によってもたらされた葛網漁は、本市公郷田戸山崎辺所謂田津浦を中心として盛んに行われたものである。田戸の永島氏所蔵の弘治元年乙卯二月十一日・永祿十年丁卯三月二十五日等の古文書によっても、この豪族永島氏を中心に北条氏保護のもとに葛網漁がかなり大規模に行われたことが知られる。ところが天正年間の末頃になると漁場の中心が次第に北上し本牧辺に移っている。しかし当地方にもこの漁法が残っていたとみえ、天保十五年に龍崎戒珠のものした「新編三浦往来」にも「野比葛網云々」とある。この葛網は地漕網ともいい、鯛を目標としたもので例の三浦浄心の慶長見聞集にある「地獄網」であろう。この葛網漁をもたらした紀州漁民が先ず当地進出の第一陣であったのである。

近世に入り、慶長前後から徳川氏が江戸に幕府を開くとともに紀州漁民の第二陣がやって来た。和歌山市加太町利光氏所蔵の「みよばなし」や「八手網漁業沿革並雑記」などによれば、元和年中（二年）に加太町の大甫七十郎が、浦伝いに伊豆・三浦・房総と網をおろして稼業し関東最初の鰯網漁をしたと記されている。勿論八手網である。「江浦干鰯問屋仲買根元由来記」に大甫七十郎が浦賀から上総へ渡海し、川津村矢ノ浦で弐艘張という八手網をおろし鰯漁をしたところ大漁であったと記されている。この大甫の通信により紀州漁民が、次ぎ次ぎに集団的な関東出稼ぎをはじめ鰯漁業の盛大を極めたのである。

同書に「寛永年中関東鰯漁評判に付紀州泉州其外西之宮辺より漁師追下り候内下津浦七兵ヱ市郎右ヱ門両人相州三浦郡下浦に而鰯網致開業候則相州浦に鰯漁之始関東任せ網根元に御座候」とある。これが第三陣の出稼ぎである。「みよばなし」にも「寛永の頃塩津下津浦泉州などよりも相州三浦下浦房州天津浦荻田安房辺にて漁業しマカセ網職の始也」とある。これらのように寛永の頃南北下浦を中心にマカセ網職の移住が行われ、東京湾の鰯漁が展開されたものである。貞享三年頃には馬堀浦・大津浦・堀之内浦・田戸浦・浦之郷浦を五ヵ浦と呼びその漁場として有名であった。特にこのマカセ網は、本市ではよく人に知られ、現に「マカセ井戸」「マカセ稲荷」等の名も残り、南下浦上宮田十却寺や津久井東光寺には、宝暦四年及び同十一年・明和元年などの下津の人の墓碑数基も現存している。

「富津漁業史」の「鰯網の者差上候訴状」に「摂津和泉紀伊伊勢尾張三河安房上総相模合せて九箇国の漁師共毎年五月より十月迄四艘張の鰯網仕り相州三浦の内馬堀浦大津浦堀之内浦田戸浦浦之郷浦五ヶ所へ六十年以来罷越し旅宿仕り沖にて猟致す云々」とか「相模国三浦郡浦郷長浦横須賀公郷四箇村より紀州三河安房上総五箇国四艘張網方魚猟場出入裁許之事」など相当地元漁民との漁場争い等の紛争が生じたことはやむを得なかったことと思う。

しかし、これら三度にわたる紀州漁民の出稼移住は、地方漁民に網漁を伝え漁撈技術を指導したものと思われる。これが三浦半島特に東京湾岸漁業の本格化の偉大な力となったのである。（昭和三十三年度日本地理教育学会大会研究発表の一部より）